

Privalov 空間と関連する話題について

システム情報数理学Ⅱ分野 堀 多恵子

2004 年 2 月 12 日

1 はじめに

単位円板 $\mathbf{D}$ 上の正則関数からなる関数空間として, Nevanlinna クラス N , Smirnov クラス N^+ , Hardy クラス H^p などがある. これらの空間は 1910~1920 年代に, Nevanlinna, Smirnov, Hardy, Szegő, Riesz を代表とする数学者たちによって研究され始めた.

このような関数空間の理論は 1970 年代に飛躍的な発展を遂げた. 1977 年に Stoll が Smirnov 空間と Hardy 空間の間に位置する Privalov 空間 N^p ($p > 1$) を新しく導入した.

2 Nevanlinna 空間

$\mathbf{D} = \{z \in \mathbf{C}; |z| < 1\}$, $\mathbf{T} = \{z \in \mathbf{C}; |z| = 1\}$ と置き, σ を $\mathbf{T}$ 上の正規化された Lebesgue 測度とする.

定義 2.1 $\mathbf{D}$ 上の正則関数の全体を $H(\mathbf{D})$ で表す. このとき,

$$\sup_{0 < r < 1} \int_{\mathbf{T}} \log^+ |f(re^{i\theta})| d\sigma < \infty$$

を満たす関数 $f \in H(\mathbf{D})$ の全体を $N(\mathbf{D})$ で表し, **Nevanlinna 空間** という.

定理 2.2 $f \in N(\mathbf{D})$ ($f \not\equiv 0$) とすると, $f(e^{i\theta}) = \lim_{z \rightarrow e^{i\theta}} f(z)$ が $\mathbf{T}$ 上 $a.e.(\sigma)$ で存在し, $\log f(e^{i\theta}) \in L^1(\sigma)$ である. $f(e^{i\theta})$ を $f(z)$ の**境界関数**という.

定義 2.3

$$\begin{aligned} \lim_{r \uparrow 1} \int_{\mathbf{T}} \log(1 + |f(re^{i\theta})|) d\sigma \\ = \int_{\mathbf{T}} \log(1 + |f(e^{i\theta})|) d\sigma \end{aligned}$$

を満たす $f \in N(\mathbf{D})$ の全体を $N^+(\mathbf{D})$ で表し, **Smirnov 空間** という.

定義 2.4 $A \in H(\mathbf{D})$ が,

$$\begin{cases} |A(e^{i\theta})| = 1 & a.e.(\sigma) \text{ on } \mathbf{T}, \\ |A(z)| = 1 & \text{on } \mathbf{D} \end{cases}$$

を満たすとき, **内関数**という.

定義 2.5 $\mathbf{D}$ 上で,

$$f(z) = C \exp \left(\int_{\mathbf{T}} \frac{e^{it} + z}{e^{it} - z} \log \varphi(e^{it}) d\sigma \right), \quad z \in \mathbf{D}$$

の形の関数を**外関数**という. ここで, $\varphi \geq 0$, $\log \varphi \in L^1(\sigma)$, $C \in \mathbf{C}$, $|C| = 1$ である. f が外関数なら, $f \in N^+(\mathbf{D})$ である.

定理 2.6 $f \in N^+(\mathbf{D})$ とする. このとき, f が外関数であることの必要十分条件は, f が $N^+(\mathbf{D})$ で可逆なことである.

3 Hardy 空間と Privalov 空間

定義 3.1 $0 < p < \infty$ とする.

$$\sup_{0 < r < 1} \int_{\mathbf{T}} |f(re^{i\theta})|^p d\sigma < \infty$$

を満たす $f \in H(\mathbf{D})$ の全体を $H^p(\mathbf{D})$ で表し, **Hardy 空間** という.

定義 3.2 $p > 1$ とする.

$$\sup_{0 < r < 1} \int_{\mathbf{T}} \left\{ \log(1 + |f(re^{i\theta})|) \right\}^p d\sigma < \infty$$

を満たす $f \in H(\mathbf{D})$ の全体を $N^p(\mathbf{D})$ で表し, **Privalov 空間** という.

命題 3.3 (i) $H^p(\mathbf{D})$ ($1 \leq p$) はノルム,

$$\|f\|_p = \sup_{0 < r < 1} \left\{ \int_{\mathbf{T}} |f(re^{i\theta})|^p d\sigma \right\}^{1/p}$$

で, Banach 空間である.

(ii) $H^p(\mathbf{D})$ ($0 < p < 1$) は距離,

$$\rho(f, g) = \sup_{0 < r < 1} \int_{\mathbf{T}} |f(re^{i\theta}) - g(re^{i\theta})|^p d\sigma$$

で, 完備な線形空間である.

(iii) $N^p(\mathbf{D})$ ($p > 1$) は距離,

$$d_p(f, g) = \sup_{0 < r < 1} \left(\int_{\mathbf{T}} \left\{ \log(1 + |f(re^{i\theta}) - g(re^{i\theta})|) \right\}^p d\sigma \right)^{1/p}$$

で, 完備な多元環である.

対応 $f(z) \rightarrow f(e^{i\theta})$ は, $\mathbf{T}$ 上の同様な距離に関して等距離同型なので同一視し, $H^p(\mathbf{D})$, $N^p(\mathbf{D})$ などを単に H^p , N^p などと書く.

命題 3.4 (i) $1 < p < q < \infty$, $0 < r < s < \infty$ に対して,

$$H^s \subsetneq H^r \subsetneq N^q \subsetneq N^p \subsetneq N^+,$$

$$(ii) \bigcup_{r>0} H^r \subsetneq \bigcap_{p>1} N^p,$$

$$(iii) \bigcup_{p>1} N^p \subsetneq N^+,$$

4 N^p 上の外関数

定義 4.1 f が N^p の外関数とは,

$$f(z) = C \exp \left(\int_{\mathbf{T}} \frac{e^{it} + z}{e^{it} - z} \log \varphi(e^{it}) d\sigma \right), \quad z \in \mathbf{D}$$

の形で表されることをいう. ここで, $\varphi \geq 0$, $\log \varphi \in L^1(\sigma)$, $\log^+ \varphi \in L^p(\sigma)$, $C \in \mathbf{C}$, $|C| = 1$ である.

定理 4.2 $f \in N^p$ とする. f が N^p の外関数であることの必要十分条件は $f_k f \xrightarrow[k \rightarrow \infty]{} 1$ となる $\{f_k\} \subset N^p$ が存在することである.

定理 4.3 $f \in N^p$ とする. f が N^p の外関数であることの必要十分条件は, $f \in N^p$ から生成される N^p のイデアル fN^p が N^p で稠密なことである.

5 Privalov 空間の不変部分空間

この節では, $N^1 = N^+$ とおき, $1 \leq p < \infty$ とする.

$$\left(\int_{\mathbf{T}} \left\{ \log(1 + |f(e^{i\theta})|) \right\}^p d\sigma \right)^{1/p} < \infty$$

を満たす $\mathbf{T}$ 上の可測関数の全体を $(\log^+)^p$ で表す. このとき, N^p は $(\log^+)^p$ の閉部分空間である.

定義 5.1 $\mathbf{T}$ 上の可測関数 f が **ユニモジュラー** であるとは, $\mathbf{T}$ 上 $a.e.(\sigma)$ で $|f(e^{i\theta})| = 1$ であることをいう.

定義 5.2 M を $(\log^+)^p$ ($p > 1$) の閉部分空間とする. M が **不変部分空間** であるとは, $\chi M \subset M$ が成り立つことをいう. 特に, $\chi M \subset M$, $\chi M \neq M$ のとき **単純不変部分空間** といい, $\chi M = M$ のとき **重不変部分空間** という. ここで, $\chi(e^{i\theta}) = e^{i\theta}$ である.

定理 5.3 (a) $(\log^+)^p(\mathbf{T})$ のすべての単純不変部分空間 M は, $M = \varphi N^p(\mathbf{T})$ となるようなユニモジュラー関数 φ を含む.

(b) $(\log^+)^p(\mathbf{T})$ のすべての二重不変部分空間 M には, $M = C_E(\log^+)^p(\mathbf{T})$ となるような $\mathbf{T}$ の可測部分集合 E が存在する.

系 5.4 M が N^p の閉イデアルなら, $M = AN^p$ なる内関数 A が定数倍を除いて一意に存在する.

参考文献

- [1] Matsugu, Y. *Invariant Subspaces of the Privalov Spaces*, Far East J. Math. Sci. 2(4) (2000), 633–643.
- [2] Mochizuki, N. *Algebras of Holomorphic Functions between H^p and N^+* , Proc. Amer. Math. Soc. 105 (1989), 898–902.
- [3] Stoll, M. *Mean Growth and Taylor Coefficients of Some Topological Algebras of Analytic Functions*, Ann. Pol. Math. 35 (1977), 139–158.